

世界文学の一端を担う

酒寄進一

ドイツはこの数年、国、州、文化財団をあげてドイツ文学の世界文学化を押し進めようとしている。ドイツ国内に翻訳者が長期滞在できるアート・イン・レジデンスまで次々と増やし、さまざまなイベントやワークショップも開かれている。僕も、この三月ベルリンの文学コロキウム・ベルリンが主催する翻訳者会議に参加してきたばかりだ。イギリス、イタリアからはじまってマケドニアやイランやアゼルバイジャンなどから総勢三十三人の翻訳者が招待され、十二日間にわたって今伸び盛りの新進作家や評論家、編集者などと熱い議論を交わしてきた。

そこで繰り返し語られたのが、自国の言葉で物語を紡ぐ作家が世界文学の作家になるためには翻訳者が絶対に欠かせないということだ。同時にドイツ語をツールにしている各国の翻訳者の間にネットワークを作り、ドイツ文学をより濃密に世界各国に伝える方策を模索している。

三月にできたドイツ国内の作家、編集者、評論家とのコ

ネクションや、世界各地の翻訳者とのネットワークによる成果は、これからおいおい翻訳出版の形で日本の読者に届きたいと思っている。

ここではこれまでの翻訳体験のなかから苦労話というか、新たな翻訳の試みをいくつか紹介したいと思う。

物語を翻訳するということは、単なる言葉の置き換えではすまない。人は何に喜ぶのか、何に怒るのか、何を憂えるのか、何を笑うのか、それもまた文化によって差異がある。こうした感情の機微が生まれる背景となる他文化の文脈を日本の文脈にどう置き換えるかということも課題になるだろう。

感情の機微といっても様々あるが、翻訳が難しいのはなんとんでも読者を笑わせなければならぬときだろう。文学の笑いは知識と状況が瞬間的につながるのと起りえない。異なる文化の笑いの状況がその背景となる知識が欠けているために伝わらない、ということはよくあることだ。

ラルフ・イーザウの『パーラ』（あすなる書房）は、言葉泥棒ジットと闘う少女バーラの物語で、ふたりの戦いを通して言葉の様々な魅力に光が当てられる。そのなかでも特に重要な要素は言葉遊びだ。ジットが住む城は彼が盗んだ本で建てられているが、タイトルはオリジナルから微妙にずれている。たとえば、